

独自のスタイルで木彫画を楽しんでいます！



[日本画](#)

掛川市在住の青野馨さん(72歳)はシナベニア合板を彫って絵画を描いています。彫るといっても版画ではありません。日本画の「もりあげ」という手法を応用したもので、独自のスタイルで創作活動に取り組んでいます。今回は1年中創作活動や展覧会で多忙な青野さん取材させていただきました。



[日本画](#)

(写真左 山口県青海島の風景)



[日本画](#)

(写真右 松葉・樹皮が彫ってある)



[日本画](#)



[日本画](#)

青野さんの描かれた絵を拝見すると日本画のように見えますが、よく見ると彫ってあることがわかります。展覧会場では気付く人は少ないそうです。でも、青野さんにとっては、彫ることによって遠近感やくっきり感がある絵になるということです。通常日本画を描くときは輪郭線を墨で描き色を付けて行きますが、青野さんは「物には実際線は無い」ということで、彫ることによって境目が出来、遠近感やくっきり感が表現されているということです。彫刻には「浮き彫り」と「沈め彫り」がありますが、青野さんは後者の「沈め彫り」で浅く彫ることを日本画に取り入れて作品を創作されています。完成した絵を青野さんは「木彫画」と読んでいます。

ここで青野さんのプロフィールをご紹介します。

青野さんは、高校生時代に生物部に所属し昆虫大好き少年として昆虫を追いかけていました。さらに、大学でも理学部生物学科で植物学を専攻し、卒業後は高校で生物を教える先生や教育指導者、校長先生を歴任され定年を迎えました。昆虫や植物といった生物に関心があったことが、後の青野さんの画風に大きく影響をしています。

まず60歳で定年を迎え、退職後は何をしようかと考えた時に、一つはこれまでのキャリアを生かして教職関係に進むか？もう一つは今までやったことのないことに残りの人生をかけ、新しいことにチャレンジするか？この二つでした。青野さんは敢えて後者を選択し、新しいことにチャレンジすることになりました。



日本画



日本画

そこで、43歳の頃から独学で彫刻や版画の勉強をしたことを生かし、それに日本画の要素を取り入れた作品を作ってみようと思い、日本画の勉強をするために、2008年(60歳)から2016年まで京都造形芸術大学の通信課程を8年間勉強しました。絵画と木彫りが結びつき「木彫画」となったのは、年賀状を木版画で作り、30回以上重ね刷りしたことが原点になったようです。(写真左 彫刻作品、写真右 版画の年賀状)



日本画



日本画

(写真左 今年の6月の展覧会案内ハガキ) (写真右 3月に開催された展覧会)

そして、実際に作家として参加したのが2012年の掛川市の文化展からでした。それ以降ギャラリーで個展を開催したり、静岡県日本画連盟展に応募したり、サークル展や色々な会の展覧会に参加されています。

年間10点以上の作品を創作され、ほぼ毎月のように開催されている展覧会にも出展されて多忙な毎日を送っていらっしゃいますが、どのようにして創作活動をされているのか伺ってみました。

まず、題材は子供の頃追いかけて回っていた昆虫の世界をテーマにして、花と昆虫の世界で物語が出来上がればいいなと思っています。日々の生活や旅行する中で見つけることが多いようです。スケッチしたり写真に撮ったりして保存しています。「いい景色」というのは絵はがきにはなっても、青野さんにとっては絵の題材にはなりません。写真の中の切り取った部分が絵の題材となっています。それは若い頃から昆虫の世界を研究してきたので昆虫も描きたいし、また、花も描きたいし、物語風の絵を描きたいからです。昆虫や植物の名前や特徴を詳しく知っていると、景色が大雑把に見えなくなってしまっているようです。例えば、川の土手に生えている植物の葉っぱが、虫に食われた痕があると〇〇虫が葉の裏側にいるなとい

うことが分かってしまうようです。このことはプラス面でもありマイナス面でもあります。

青野さんが自然の風景を見るとどうしても生物学的にみてしまうようです。例えば、ここに木があるとします。木の名前を知っていると特徴や違いに気付くことができます。細かい所まで見えてしましますが、このことを生かして絵にすることが出来ればいいなと思っています。

画材については基本的には日本画と同じようですが、まずシナベニア合板を使います。一番のポイントは大きな合板でも反りにくいし、木目に邪魔されず細密に彫ることが出来ることです。



[絵の具](#)



[日本画](#)

絵の具は鉱物を粉にして「にかわ」に溶いて使います。砂のように粗い粉からパウダー状の粉まで15段階に分かれているようです。鉱物を粉にしている希少な赤系や群青系などは金より高価なものもあります。石（鉱物）そのものが宝石のように貴重なものになります。また、塗った直後の色と乾いたときの色が違うので経験がないと色づけが出来ません。

筆は砂を塗るようなものなので消耗が激しく、乾くとヤスリと同じような状態となります。筆を作る職人も減り高価なものになってきました。

また、紙は普通の和紙（厚く塗ることが難しい）ではなく、麻繊維を漉き込んでいる丈夫な麻和紙（厚く塗ることが出来る）を使います。これを作る職人も少なくなっています。

彫っていくときに使用する彫刻刀も約50種類あります。最初の構図をしっかりしないと書き直しがきかない為、下絵を作ったどう彫っていくかを事前に考えておかないといけません。下絵は墨で書いてそれにカーボン紙を敷いて版に写していきます。それを彫刻刀で輪郭線を彫り、全体に凹凸を付けていきます。



[日本画](#)



[日本画](#)



[日本画](#)



[日本画](#)



[日本画](#)



[日本画](#)

([青野さんの作品をよく見ると必ず昆虫がいます](#))

こうして青野さんは日々精力的に創作活動を続けています。青野さんのように全く違った世界へチャレンジされることも定年退職後の人生設計のご参考にしていただければと思います。

(お問合せ先 0537-22-9817 青野 馨 様)

生きがい特派員 小笠・榛南地区 高井 豊